様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：１４４０３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｈ０２６３４

研究課題名（和文）青年期から中年期の人生の意味づけのメカニズムと時代性：長期縦断研究

研究課題名（英文）The mechanisms of making meaning of life and its times from adolescence to middle-age: Long-term longitudinal study

研究代表者
白井　利明（Shirai, Toshiaki）

大阪教育大学・教育学部・名誉教授

研究者番号：００１７１０３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,100,000円

研究成果の概要（和文）：人は人生をどう意味づけているのだろうか。本研究は30年以上に及ぶ世界的に稀有な縦断研究により、30代もアイデンティティは発達するという先行研究による予想とは異なり、低下することが示された。それは成人期に自分を軸に生きられないためだったり、生活の不安定さが危機を作るためだったりすることが考えられ、それは本研究の協力者が「失われた10年」と言われた世代であるという時代性とも関係する可能性が考えられた。また、研究協力者の調査の振り返りは人生を肯定的に意味づけることが示された。以上から、自分中心の時間を持てることがアイデンティティを発達させ、他者との振り返りが人生を意味づけることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
現代日本で「失われた10年」と言われた世代が40代となり、年長フリーター（厚生労働省，2010）など、かつてない問題を抱えている現状を踏まえ、本研究はアイデンティティと時間的展望の関連の検討から人生の意味づけのメカニズムと時代性を解明した。生涯発達心理学への貢献としては、「発達の主体」としての個人の発達メカニズムを解明し、成人期の発達が一人ひとりの人生の文脈に埋め込まれていることを示唆した。社会への貢献としては、たとえば家庭中心で自分中心の時間を持てないといった成人期の在り方を改善し、他者と人生の振り返りをすることが、30代から40代の幸福を高める可能性があると提言した。

研究成果の概要（英文）：This study is an internationally unique long-term longitudinal study lasting more than 30 years. This study expanded the longitudinal data of people in their 40s, and first, identity status dropped in their 30s, contrary to general expectations. It was interpreted that this is because people in their 30s cannot spend time for themselves as they focus on family and work in contemporary societies. Secondly, it was shown in either the further rise in adolescent future orientation or the changing to present orientation toward middle age. The former showed a consistent height of crisis, which was assumed to be caused by unstable lives, and the latter meaning was verified by waiting for the analysis of full-fledged midlife profile data in their 50s. Third, it was suggested that research participants' looking back on regular surveys could create positive meaning of life. These results were thought to reflect the social unstable situation in modern age in Japan.

研究分野：発達心理学

キーワード：生涯発達　時間的展望　アイデンティティ　ジェネラティヴィティ　縦断研究　成人期　ナラティブ　ライフコース

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は、「失われた 10 年」といわれた世代が 40 代となり、年長フリーター（厚生労働省、2010）などかつてない問題を抱えている現状を踏まえ、その世代がどのように人生を意味づけているのか、そこに時代性がどのように関与するのかを検討する。具体的には、アイデンティティという自分らしさを実現し、時間的展望という希望をもって生きることの仕組みと時代性を明らかにする。

アイデンティティの生涯発達を解明するには長期縦断研究が不可欠であるが、世界中を見渡してもほとんどなされていない（貴重な研究として、Fadjukoff, Feldt, Kokko & Pulkkinen, 2019; Josselson, 2017 がある）。本研究は 30 年以上にわたる長期縦断研究であるばかりでなく、毎年の定期調査からきめ細かい時系列データを蓄積しており、さらに量的データだけでなく面接調査から質的データも取っており総合的に検討できる。これらの点で世界的に稀有な縦断研究である。

今日のアイデンティティの生涯発達研究は発達の筋道を明らかにしつつある。Kroger, Martinussen & Marcia （2010）は、青年期から成人期にかけてのアイデンティティ発達の縦断研究のメタ分析から、アイデンティティは達成に向かう（つまりアイデンティティステイタスが上昇する）こと、しかしいくつかの筋道があり、そのうちの半数は変化が見られないことを示唆している。そうしたアイデンティティ発達の筋道の違いがどのようなメカニズムで生まれているのかを明らかにすることが今日的課題となっている。

本研究はアイデンティティ発達のメカニズムについて時間的展望との関わりから検討する。アイデンティティ発達のメカニズムは Piaget の均衡化モデルで説明されることが一般的であるが、限界もある。ここでは「否定的な出来事に遭遇することで危機が生じ、新たな文脈に適合するコミトメントが探求され、アイデンティティが再構成される」と仮定されているが、実際にはアイデンティティの再構成は出来事と一対一対応しているわけではない。時間的展望の観点（Nuttin, 1984）からすると、出来事との遭遇がなくても、たとえば予定した出来事がない場合も危機となることもある。たとえば 30 歳までに子どもを産むために 29 歳までに結婚するという計画を持っていたのにそれが実現しないということ自体が危機になりうる。このように個人がどのような時間的展望を持って生きているかによって、人生の出来事の有無の意味が変わってくる。つまり、個人の発達を左右するのは出来事そのものではなく、個人にとっての出来事の意味なのである（Nuttin, 1984）。したがって、個人は出来事に影響されて人生を変化させられる受動的な存在ではなく、自ら自分の人生を設計し、環境との相互作用を自ら意味づけて、人生を創造していく能動的な存在である（Nuttin, 1984）。本研究は、このように個人を「発達の主体」と捉える立場から、人生の意味づけのメカニズムと時代性を解明する。

２．研究の目的

本研究は、青年期から中年期にかけてのアイデンティティ発達のメカニズムのいくつかの筋道において、どのように時間的展望がかかわっているかを明らかにする。それにより、人生の意味づけのメカニズムと時代的特徴を解明する。

３．研究の方法

第１に、本研究は同じ人を長期にわたって寄り添って追跡していく縦断研究であり、本研究期間もこれまでと同じ質問紙調査を実施し、縦断データを 40 代まで拡張した。具体的には、研究協力者に、アイデンティティ尺度（加藤, 1983）と体験的時間的展望尺度（白井, 1994）および時間的指向性質問項目（白井, 1997）による質問紙調査を行った。

第２に、調査の継続によって拡張した縦断データを使って時系列データ分析を行った。アイデンティティと時間的展望の関連について、ゆらぎも想定される相互変化パターンがどのような意味を持つかについて検討した。

第 3 に、調査結果を研究協力者にフィードバックして振り返りを求めることで、人生をどのように意味づけるのかについて、2 回にわたる集団的な面接調査により検討した。1 回は対面実施で行い、もう 1 回はコロナウィルス流行下だったためオンライン実施となった。

以上の調査は全て研究協力者の同意に基づいて実施しており、回答したくない場合や質問項目については回答しなくてもよいとした。

４．研究成果

第１に、未来指向とアイデンティティ発達の関連について、一人ひとりの時系列データに基づき自己相関を取り除いた相関係数で見ると、－.79 から .37 という大きな幅のある多様性が見られた（Shirai & Kunnen, 2020）。マイナスの相関係数はこれまでの研究では見たこともないものである。なぜなら、従来は未来指向とアイデンティティ発達はプラスの相関関係が見られ、両者は相互促進的に影響を及ぼすものと考えられてきたからである。つまり、未来指向がアイデンティティ発達を促し、今度はアイデンティティ発達が未来指向を促すと考えられてきた。しかし、理論的に考えると、マイナスの相関係数はありうるものとして妥当であると考えられた。アイデンティティが拡散すると未来指向が高まってアイデンティティ探求に向かうと考えられるが、これは相関係数としては確かにマイナスで示されると思われるからである。このことからすると、従来の交差遅延モデルに基づく研究で得られるプラスの相関関係は、同一地点ではマイナスの相関関係として現れるものであり、そうであるなら横断研究で示されてきたプラスの相関関係は単に未来指向の人はアイデンティティが高いといった個人差を示すだけだった可能性が考えられる。それを踏まえて、さらにアイデンティティと未来指向の相互作用がアイデンティティの発達にどうのように影響するかを考えてみると、縦断研究でプラスの相関係数を示す人はアイデンティティが拡散に向かうと未来指向が高まるどころか降下してしまうという人であるが、それゆえアイデンティティが変化できず、低いステイタスのままに固定化されることが予想される（白井, 2022a）。今後は、こうした解釈の可能性を検討することで、ゆらぎながらアイデンティティが発達していく筋道のメカニズムと、アイデンティティが変化しない筋道のメカニズムの違いを解明することが課題である。

第 3 に、未来指向の生涯発達パターンを分類したところ、一貫して青年期の未来指向が上昇するパターンと、20 歳代で上昇して 30 代は下降する（現在指向に転換する）パターンの 2 つに分類された。そこで、それぞれのパターンごとにアイデンティティ発達がどのような筋道を描くかを検討したところ、どちらのパターンでもアイデンティティステイタスは下降する（ステイタスが拡散に向かう）ことが示された（白井・中村, 2017）。これは 2 つの点で先行研究から予想されない結果であった。

１つは、未来指向が一貫して上昇するパターンでアイデンティティステイタスが下降することから、未来指向がアイデンティティ発達を促すという先行研究の予想に反している

ことである。このパターンは、もう 1 つの現在指向に転換するパターンに比べて、一貫して危機が高いことが示された。典型例の分析からは、転居を繰り返すことや失業といった不安定な生活と人生を送っていた（白井・中村, 2017）。このパターンは危機を解決するため、未来指向をいっそう高めているが、それでも解決できず、悪循環に陥っていることが考えられる。

もう 1 つは、30 代に現在指向に転換するパターンでもアイデンティティステイタスが下降することから、青年期は未来指向だが中年期は現在指向がアイデンティティ発達を促すという先行研究の予想（白井, 1997）にも反していることである。その理由について、本縦断研究における 40 代前半の個別の面接調査（アイデンティティステイタス・インタビュー）によれば、30 代から 40 代にかけてたとえば家庭中心で自分の時間を自分で自由に使えず、それゆえ自分の生活や人生について自分を軸に考えることができないためであることが考えられた。この見立ては従来から考えられてきた成人期が中年の危機でアイデンティティ拡散を引き起こしアイデンティティの再構築に向かうとするものとは異なるものである。実際のところ、本研究の 40 代前半の面接調査では明白な中年の危機は見て取ることはできなかった。ただし、ジェネラティヴィティテイタス・インタビューを行ったところ、概ねジェネラティヴィティへの投入は高いものの、ジェネラティヴィティの危機に取り組むまでには至っていないと考えられた。ただし、こうした結果は 40 代前半という、まだ中年期の入り口に入ったか入っていないかの年代であるためという可能性も考えられるため、50 代という本格的な中年期のデータ収集を待たなければならないと考えられる。

第 3 に、集団的面接調査において、研究協力者から「（縦断調査に答えることは）私を含め本当に多くの人たちの人生の支えのようなものになっていると感じました」との発言があった。この発言は定期調査に回答するなかで「『自分の人生は間違っていない』と言ってもらっている気がする」といったものである。そうした気づきが生じる理由として、研究協力者が回答するという行為自体と、研究者からのフィードバックをとおして、自分のありかたを振り返っていることが考えられる。特に、後者については、研究者は定期調査を依頼する手紙を書いているが、それが研究協力者を励ますという、研究者と研究協力者の相互行為によって生じている可能性も考えられる。研究協力者の回答は研究者の調査依頼という＜呼びかけ＞に対する＜応答＞であり、そして研究者の依頼は研究協力者の回答という＜呼びかけ＞に対する＜応答＞であると考えられるなら、そのように両者の＜呼びかけ＞と＜応答＞の交換が一連のセットとなった相互行為の中から研究協力者の「『自分の人生は間違っていない』と言ってもらっている気がする」という気づきが生まれていると考えることもできる。

以上から、第 1 に、成人期のアイデンティティ発達は多様であり、そこにはアイデンティティ発達が一人ひとりの生活と人生に埋め込まれていることが示された。具体的には、30 代から 40 代がたとえば家庭中心で自分を軸に生活を回せないことや生活の不安定さが成人期のアイデンティティ発達を阻害していることが考えられた。これらは一般的にそうだといって済ますのではなく、本縦断研究が「失われた 10 年」といわれた世代を対象としていることを念頭に置き、現代日本の時代的特徴を反映している可能性も検討する必要があろう。第 2 に、研究協力者の研究者との調査の振り返りは人生を意味づけることが示された。以上から、自分中心の時間を持てる余裕を作ることがアイデンティティを発達させ、他者との振り返りが人生を意味づけるのではないかと示唆された。

今後は、縦断データをさらに 50 代の中年期まで拡張することで、また一人ひとりの生活

と人生に埋め込まれた過程と重ねて検討することで、本研究が示唆した人生の意味づけと時代性をより深く解明していくことが求められる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計15件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 白井利明	４．巻 11
２．論文標題 語りから立ち上がる人生－聴き手の役割－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 N: ナラティヴとケア	６．最初と最後の頁 79-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 白井利明	４．巻 116
２．論文標題 語りから立ち上がる未来－前方視的再構成法－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 臨床心理学	６．最初と最後の頁 236
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 白井利明	４．巻 11
２．論文標題 語りから立ち上がる人生－聴き手の役割－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 N: ナラティヴとケア	６．最初と最後の頁 79-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 白井利明	４．巻 20(2)
２．論文標題 語りから立ち上がる未来－前方視的再構成法－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 臨床心理学	６．最初と最後の頁 236-236
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 白井利明	4．巻 84
2．論文標題 面接調査の醍醐味	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本発達心理学会ニューズレター	6．最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 白井利明・野村晴夫・尾崎仁美・日潟淳子・徳田治子・中村知靖・遠藤利彦	4．巻 60
2．論文標題 人生の発達と語り直し－青年期から中年期の縦断研究－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本教育心理学会第60回総会発表論文集	6．最初と最後の頁 38－39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊東裕司・佐藤浩一・下島裕美・楢原真也・山本晃輔・白井利明	4．巻 60
2．論文標題 自伝的記憶と成長との関係を考える－生涯教育の様々なステージで－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本教育心理学会第60回総会発表論文集	6．最初と最後の頁 10－11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 白井利明	4．巻 60
2．論文標題 ダイナミック・システムズ・アプローチによる縦断データ分析－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本発達心理学会第30回大会発表論文集	6．最初と最後の頁 452
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊東裕司・佐藤浩一・下島裕美・楢原真也・山本晃輔・白井利明	4．巻 58
2．論文標題 自伝的記憶と成長の関係を考える―生涯教育の様々なステージで―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 教育心理学年報	6．最初と最後の頁 263－273
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 白井利明	4．巻 66
2．論文標題 クルト・レヴィンにとって時間的展望とは何か―ダイナミック・システムズ・アプローチとしての生活空間論―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 大阪教育大学紀要(総合教育科学)	6．最初と最後の頁 75－94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Shirai, Toshiaki, Nakamura, Tomoyasu, & Higata, Atsuko	4．巻 24
2．論文標題 A balanced time orientation and identity formation in adulthood: A longitudinal study from age 20 to 37	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Proceedings of International Society for Research on Identity	6．最初と最後の頁 34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 白井利明	4．巻 81
2．論文標題 現在のキャリア満足は過去の就職活動の意味づけを肯定化するか―青年期から中年期への縦断研究（Ⅰ）―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本心理学会大会発表論文集	6．最初と最後の頁 16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 白井利明・中村知靖	4．巻 25
2．論文標題 青年期から成人期の時間的指向性とアイデンティティの曲線モデルからの発達軌跡分析―青年期から中年期への縦断研究（Ⅱ）―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本青年心理学会大会発表論文集	6．最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 白井利明・野村晴夫・やまだようこ・都筑　学・森岡正芳・清水寛之	4．巻 29
2．論文標題 人生の語り直しの生涯発達をとおした時間論の構築	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本発達心理学会大会発表論文集	6．最初と最後の頁 58-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Shirai Toshiaki、Kunnen E. Saskia	4．巻 20
2．論文標題 The Relation between Commitment and a Balanced Time Orientation in Adulthood: Differences between and within Individuals	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Identity	6．最初と最後の頁 132～142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/15283488.2020.1747468	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　4件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 白井利明・中村知靖・杉村和美・日潟淳子・野村晴夫
2．発表標題 成人期女性の語りにおけるアイデンティティと時間的展望
3．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4．発表年 2020年

１．発表者名 半澤礼之・園田直子・柏尾眞津子・石川茜恵・大橋靖史・白井利明
２．発表標題 過去展望から捉える青年の時間的展望
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 谷　冬彦・大倉得史・中谷陽輔・白井利明
２．発表標題 「アイデンティティ」の魅力を再考する（その6）－アイデンティティの測定法再考－
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 白井利明
２．発表標題 大学生のアイデンティティと時間的指向性の理想と現実－アイデンティティと時間的指向性における発達の方向－
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 白井利明・中村知靖・杉村和美・日潟淳子・野村晴夫
２．発表標題 成人期女性の語りにおけるアイデンティティと時間的展望
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 半澤礼之・園田直子・柏尾眞津子・石川茜恵・大橋靖史・白井利明
２．発表標題 過去展望から捉える青年の時間的展望
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 谷　冬彦・大倉得史・中谷陽輔・白井利明
２．発表標題 「アイデンティティ」の魅力を再考する（その6）－アイデンティティの測定法再考－
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 白井利明
２．発表標題 大学生のアイデンティティと時間的指向性の理想と現実－アイデンティティと時間的指向性における発達の方向－
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Shirai, Toshiaki
２．発表標題 A 26-years longitudinal study of identity and time perspective (TP) in adolescence and adulthood
３．学会等名 Time Perspective Seminar（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Shirai, Toshiaki
２．発表標題 Time orientation and culture from the perspective of Japan: A balanced time orientation
３．学会等名 Time Perspective Seminar（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Shirai, Toshiaki
２．発表標題 On Zimbardo’s balanced time perspective
３．学会等名 Time Perspective Seminar（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 白井利明
２．発表標題 人生の意味づけのメカニズムと時代性－26年間の縦断研究からみた青年期から中年期に至る発達－
３．学会等名 日本心理学会第81回大会（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計5件

１．著者名 白井利明	４．発行年 2020年
２．出版社 金子書房	５．総ページ数 112
３．書名 生涯発達の理論と支援	

１．著者名 川島　大輔、松本　学、徳田　治子、保坂　裕子	４．発行年 2020年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 160
３．書名 多様な人生のかたちに迫る発達心理学	

１．著者名 原　清治、春日井　敏之、篠原　正典、森田　真樹、山岡　雅博	４．発行年 2019年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 242
３．書名 生徒指導・進路指導	

１．著者名 白井利明	４．発行年 2020年
２．出版社 金子書房	５．総ページ数 112
３．書名 生涯発達の理論と支援	

１．著者名 川島　大輔、松本　学、徳田　治子、保坂　裕子	４．発行年 2020年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 160
３．書名 多様な人生のかたちに迫る発達心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	尾崎　仁美 (Ozaki Hitomi) (10314345)	京都ノートルダム女子大学・現代人間学部・教授 (34312)	
研究分担者	日潟　淳子 (HIgata Atsuko) (20621121)	姫路大学・教育学部・教授 (34534)	
研究分担者	中村　知靖 (Nakamura Tomoyasu) (30251614)	九州大学・人間環境学研究院・教授 (17102)	
研究分担者	徳田　治子 (Tokuda Haruko) (40413596)	高千穂大学・人間科学部・教授 (32637)	
研究分担者	遠藤　利彦 (Endo Oshihiko) (90242106)	東京大学・大学院教育学研究科（教育学部）・教授 (12601)	
研究分担者	上田　裕美 (Ueda Hiromi) (80302636)	大阪教育大学・教育学部・准教授 (14403)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

オランダ王国	フローニンゲン大学			